2022 年度　研究旅行奨励制度　報告書

江戸時代の越中富山売薬

24AR111　園田萌香

目次

はじめに
・研究旅行の目的
・期待される成果
・研究旅行日程

1. 富山売薬について
・はじまり
・反魂丹の作り方
・道具の紹介
・組について

2. なぜ富山から全国へ広がったのか
・気候
・地形（輸送方法）

3. 富山藩江戸藩邸について

おわりに

参考文献

はじめに

研究旅行の目的

富山の薬売りの始まりは「江戸城腹痛事件」と言われている。これは江戸城内で、突然激しい腹痛に見舞われた三春藩の藩主である秋田輝季に富山藩二代藩主の前田正甫公が常備していた反魂丹を与えたところ、たちまち痛みは治まったという事件である。噂を聞いた諸藩の大名たちがそれぞれの領内で売薬を依頼したことによりこの薬が名を馳せることになった。当時高価だった薬を「先用後利」と呼ばれる、先に薬を預け、後から利用した分だけの代金をもらい、新しい薬を補充する販売方法で富山の薬は全国に販路を広げていった。そこで当時の配置薬はどのような箱に入れられ、どのように運ばれたのか、実際の資料を見て体験してみたいと考える。また、どのようにして富山から全国各地へ薬を届けていたのか、地理的条件から調べてみたいと考える。前田正甫公が持っていた反魂丹が全国に広がったのは有名な話だが、なぜ前田正甫はよく効く薬を作り、持っていたのか調べたい。また明治時代に入ってきた西洋医学にも劣らなかった理由を史料から考察する。さらに、配置薬販売業者は訪問先に薬を渡すだけでなく、産物や地域の様子などの情報を他の地域紹介する役割を担っていたようだが、具体的にどのような物が産物とされ、どのような情報を仕入れ、他の地域に渡していたのか興味があるので明らかにしたい。また、この働きで富山はどう変化したのかを明らかにしたいと考える。

期待される成果

九州ではあまり主流でない配置薬というものの始まりを実際に現地に赴くことで、かつての配置薬と現在使用されているものとの相違点など、自らの目で確かめることができる。また、富山県は現在も薬屋の数が多いそうなので、富山にとって薬産業の重要性を理解することができる。さらに、富山の薬が全国に知れ渡るきっかけとなった「反魂丹」を最初に製造販売し始めた店舗に行き、薬を作っていた機械を見たり、実際に丸薬作りを体験したりすることができ、文献資料に加えてより理解を深めることができる。また販売業者が担っていた他の地域との交流について明らかにすることができる。

旅行日程

第１日目	福岡→富山	移動
第２日目	富山市	富山市民俗民芸村　売薬資料館、 池田屋安兵衛商店、奥田庄太郎商店
第３日目	富山市	薬種商　金岡邸 富山市立図書館
第４日目	富山→東京	移動
第５日目	東京	江戸城 富山藩江戸藩邸
第６日目	東京	国立国会図書館
第７日目	東京→福岡	移動

1. 富山売薬について

はじまり

1690 年、江戸城内で突然激しい腹痛に襲われた陸奥国三春藩（現在の福島県）の当主秋田輝季に、富山藩二代藩主である前田正甫公が常備していた「反魂丹」を与えたところたちまち痛みは治まった。これを見ていた諸藩の大名たちの間で噂になり富山の薬をそれぞれの領内で販売するように依頼した。済世救民の志が強かった正甫公は、薬御用達松井屋源衛門に製薬を命じ、反魂丹をはじめとする富山の薬を他の藩へ販売した。富山売薬は先用後利の考え方で、先用後利とは先に薬を預けておいて、後から利用した分だけの代金を受け取って新しい薬を補充する「用を先にし利を後に」という正甫公の理念が反映されたビジネスモデルで、富山の薬ならではの販売方法であり、配置家庭薬商法の神髄を表した言葉である。江戸幕府および全国の諸藩において特に領民の健康保持に力を入れていた。しかし疫病が度々起こり、医薬品は不十分な状態であった。地方の一般庶民の日常生活では通貨幣の流通が十分ではなく庶民にとって医薬品は家庭に常備することは稀であり、必要なときに商人から買わざるを得なかった。このような社会背景の中、「先用後利」の方法は画期的であり時代に合っていた。当初はそれぞれの地区のまとめ役、寺等に預け、次第に一般の家庭に預けるようになっていった。

反魂丹の作り方

反魂丹とは丸薬の一種で胃痛や腹痛に効能がある。日本において中世より家庭用医薬品として流通した。現代における処方による効能は消化液および胆汁の分泌促進であり、胃もたれや食欲不振にたいする効能がうたわれている。漢方で作られており原料は中国から輸入していた。製法は備前岡山藩の医師である万代常閑（まんだいじょうかん）から学び常備していた。図 1 で柔らかい粘土状のものを小さく絞り出し、図 2 のように綺麗に並べて上から重い板を乗せて丸くなるように回すと綺麗な丸ができ、これを乾燥させたものが反魂丹として販売される。

図 1（撮影：園田萌香）

図 2（撮影：園田萌香）

・道具の紹介

柳行李

重さ 20kg ほどの柳行李は富山の「売薬さん」のトレードマークである。5 段重ねになっており、1 段目は懸場帳、そろばん、財布、印、筆記用具。2 段目は紙風船や箸などの土産品。3 段目は回収した薬。4 段目は新しい薬、5 段目は高貴薬[1]が入っている。

（画像出典：https://www.minoriminoru.jp/agrifuture/vol093/closeup/index.html）

撮影：園田萌香

懸場帳

薬を預けた得意先の顧客名簿であり、預けた薬の種類、数、服用高はもちろん、家族構成や健康状態などが記入された。いわば江戸時代の顧客データベースである。懸場帳は貴重な財産価値をもつものであった。

撮影：園田萌香

薬箱

昔使用されていた薬箱である。この箱を各家庭に置き、半年から 1 年ごとに訪問する担当販売員へ使った分だけ支払うという方法をとっていた。当時は木製の箱が使用されたおり、現在では見られない重厚感ある箱である。現在はプラスチックが主流になっている。

紙風船

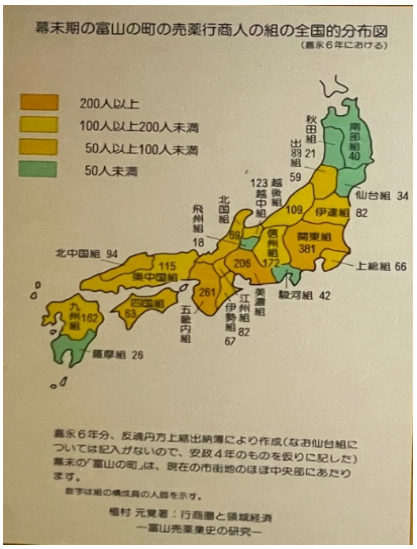
富山の置き薬の特徴としてお土産を渡すことがある。江戸時代後期から行われているおまけで人気があったのが、富山絵（錦絵）と呼ばれた売薬版画（浮世絵）や紙風船、「食べ合わせ」の表、レンゲの種などである。得意先には九谷焼の盃湯飲み、輪島塗の塗箸などの高級品を配っていた。（画像出典：https://www.nasushiobara-hoeido.com/）

---

[1] 貴重で高貴な生薬のこと。例えば牛黄（牛の胆石）や蟾酥（シナヒキガエルの分泌物）、麝香（ジャコウジカの麝香腺分泌物）など。

・組について

富山売薬行商人が諸藩で活動するにあたり、許可を得なくてはいけないため組を組織し富山藩が作った反魂丹役所にまとめて申請し、諸藩に提出した。一般の商工業者の株仲間は居住区や営業の規模・種類を基準に構成するのに対し、富山売薬行商人は行商先を基準に組を構成しているという点に特徴がある。この組という組織は富山売薬の運営をスムーズにするだけでなく、藩の財政にも貢献している。その代わり、富山藩の保護と営業独占を受けることになった。即ち、組は富山藩の株仲間ということになる[2]。



組の分布図（撮影：園田萌香）

2. なぜ富山から全国に広がったのか

①気候

富山県は日本海に面し、三方を山に囲まれ、その山々から流れる数多くの河川が複合的に扇状地を形成し、広い平野部をつくりあげた。さらに夏場の高温多湿な気候と、北アルプスからの豊富な雪解け水など稲作に適した条件をそなえている。しかし冬場は寒く、土地もやせており、商業にでていかねばならない事情があった。そこで前田正甫公は自身が薬に興味があったことから藩の収入を潤す手段として売薬に目をつけた。

②地形

・海上輸送

富山売薬商人の荷物が海路輸送されるのは東岩瀬、西岩瀬港からが主であった。日本海岸から近畿あるいは関東にいたる運輸は酒田以南の地方では西廻海運、秋田以北の場合は東回海運が多かった。西廻海運は敦賀で陸上げし、馬背で琵琶湖に出て、舟路で大津に運び、大津・伏見間は牛車で以後は淀川を船で下った。加賀藩はこの交通路を選び領内の越中や加賀から大阪に廻米するために敦賀と大津に蔵屋敷を設けていた。しかしこの場合積み替えが必要であり、運賃高になる欠点があり、積み替えのない馬関経由が次第に活発化した。北

（画像出典：https://www.mapple.net/articles/bk/17360/）

[2] 仁ヶ竹亮介 「近世富山売薬の研究」、『史文＝Tenri historical review/天理大学史文会編』(4)、2002 年、1-18

前船が日本海を盛んにしたのは江戸時代中期からで明治時代半ばまで続いた。蝦夷地から入ってくる昆布によって富山の行商人は薩摩と取引できるようになった。富山藩は昆布ロード[3]を通じて昆布を薩摩に運び、薩摩から琉球を介して中国へ送られ、中国からは薬種がもたらされ、富山の売薬商人へと渡った。北前船の母港、昆布ロードの中継地点であった富山は昆布文化が定着するとともに、売薬業で財政を潤すことができた。

・陸上輸送

輸送には人足や牛車を利用した。交通路としてまず飛騨街道と北陸街道があてられた。飛騨は信州に通ずることもでき、東海道への通路でもあった。富山からの飛騨街道のもつ商業地理的意義はきわめて大きなものであった。さらに重要だったのが北陸街道で越中は畿内の文化の東北方向への前進の拠点となり、海上からも越後に対して進められた。両街道は全国的行商の形成にはとても重要な意味をもつものだと言える。つまり越中は畿内や東北に対しても交通・政治上重要な位置にあったため全国に配置することができたといっても過言では無い。

[3] 昆布が北海道から各地へ運ばれた航路は「昆布ロード」と呼ばれ、薩摩藩により琉球王国を経由して清（中国）まで運ばれた。

3. 江戸城から江戸富山藩邸について

寛永 12 年（1635）年に「武家諸法度」の改定で外様大名は在府一年四月交代という「参勤交代制度」が定められたため諸大名は江戸での居住が必要となり、各藩邸が整備された。上屋敷、中屋敷、下屋敷、抱屋敷があり、それぞれ違う用途で使われていた。

中屋敷跡（撮影：園田萌香）

この写真の場所は台東区池之端 2 丁目、中屋敷があった場所であり隠居した藩主の正室や世子の邸宅として使用された。

上屋敷は東京大学本郷構内地区に位置しており、藩主が公務を行う公的空間と藩主や家族、家臣が居住する施設があり、富山藩・大聖寺藩は本家である加賀藩の屋敷地の一部を貸与されていた。

下屋敷は台東区北上野 2 丁目に位置し、「浅草御屋敷」と呼ばれていた。隠居した藩主や家督相続前の世子の邸宅として使用された他、休息用の別邸や罹災時の避難住宅として用いられた。

抱屋敷は上中下屋敷で足りない場合に近郊の田畑などを買い取って「抱屋敷」とした。

江戸城から江戸富山藩邸の上屋敷までの距離は徒歩で約 40 分、電車で約 30 分かかる。中屋敷までは徒歩約 1 時間、電車で約 25 分かかる。江戸時代は徒歩での移動であるので江戸藩邸から江戸城へ行き来するのにも時間がかかることが分かった。

江戸城天守閣跡（撮影：園田萌香）

おわりに

今回は富山県と東京都の二つの都市を訪れ、越中富山売薬について調査した。富山市民俗民芸村売薬資料館や薬種商金岡邸では柳行李など「売薬さん」の持ち物、懸場帳など顧客情報が載った貴重なもの、かつて使われていた薬を製造する道具や使われた原料が置かれていた。また特徴的なパッケージである昔の富山の薬が展示されていた。池田屋安兵衛商店や奥田庄太郎商店は現役の薬屋さんで今まで見たことの無い富山ならではの薬が販売されていた。池田屋安兵衛商店の販売員によると富山の薬は他の薬より効き目がいいと言う。またパッケージも昔ながらのレトロな雰囲気で外国人や観光客にも人気があると仰っていた。

江戸城では皇居の中にある天守閣跡と本丸跡など歩き周り、とても広くて江戸城が江戸時代を象徴するものであることが窺えた。その足で富山藩江戸藩邸跡まで電車で向かったが当時は歩いていたとは考えられないほどだった。坂が多くて猛暑の中では体力が奪われた。国立国会図書館では富山売薬に関する資料を見ることができた。今まで体験したことのないセキュリティ体制であったため驚いた。あらゆる方法で資料や出版物を閲覧することが可能で多くの人が利用していた。一日では読み切れないためもう一日図書館へ訪れる日を作ればよかったとも後悔が残る。元の計画では日曜日に行くつもりであったが、確認すると閉館日であったため最後の移動日に行くことができた。計画性の甘さが見て取れるので次回研究旅行など行く場合の課題となった。

今回の旅では富山売薬にとって前田正甫公の存在がどれほど大きいものか知ることができた。また気候や地形の条件が伴って富山売薬が成功を収め財政を潤すこととなったことも理解できた。昆布を輸出入する昆布ロードというもので中国から原料を得ることができたので昆布がとれない富山にとって蝦夷地の昆布は大切であるルーツであると言える。今回の目的であった「売薬さん」の他地域との交流について詳しい史料を得ることができなかったため今後の課題となった。

参考文献

植村元覚『行商圏と領域経済　富山売薬業史の研究』、日本経済評論社、1959 年
仁ヶ竹亮介「近世富山売薬の研究」、『史文＝Tenri historical review/天理大学史文会編』(4)、2002 年、1-18
塩澤明子「近世後期における富山売薬商人と旅先藩―薩摩藩との関係を中心に―」、『史文＝Tenri historical review/天理大学史文会編』(6)、2004 年、24-51
https://fuum.me/archives/1200（江戸城腹痛事件とは？）
https://goodlucktoyama.com/article/scenery-of-toyama-article/202203-maeda-masatoshi-douzou　（前田正甫公の銅像　富山市）
http://www.koukandou.co.jp/ayumi/（広貫堂の歩み）
https://intojapanwaraku.com/travel/138628/　（廣貫堂で学ぶ富山売薬の歴史）
https://www.pref.toyama.jp/1541/kendodukuri/dourokouwan/toyamakou/kj00016045.html　（富山港〔東岩瀬港〕の今昔）
https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/06_vol_104/feature02.html（北前船が運んだ北陸の食文化）
https://kome-academy.com/kome_library/culture/culture01_toyama.html（米と地域文化）